ボルノー「希望の哲学」の端緒

高　橋　　浩

はじめに

本稿の目的は，ボルノー Otto Friedrich Bollnow (1903～　)の処女論文『ヤコービの生の哲学』Die Lebensphilosophie F. H. Jacobis(1933)[1]を検討することによって，この論文が彼の「希望の哲学」Die Philosophie der Hoffnungの端緒としての性格をもつことを明確にすることである。またそのような考察を通して，「希望の哲学」に対する理解を深めてゆくことである。

その論究を筆者は，次のような過程で進めてゆくことにする。まずⅠ．においては，ボルノーの「希望の哲学」の概要を前提として提示し，Ⅱ．およびⅢ．においては，ボルノーのヤコービ研究を具体的に検討してゆきたい。そして最後にⅣ．においては，Ⅰ．の内容とⅡ．Ⅲ．の検討結果とを対比し総括することによって，ボルノーのヤコービ研究における「希望の哲学」の端緒を明確にしてゆこうと思う。

Ⅰ．ボルノー「希望の哲学」の構造

ボルノーは，自己が体系づけた哲学を総括して「希望の哲学」と呼んだ。彼は次のように述べている。「私が今まで哲学者として行なってきましたあらゆる努力は，一口で要約させていただきますならば，まさに希望の哲学と言えるでありましょう」[2]。

このボルノーの「希望の哲学」の基盤には生の哲学と実存哲学が存在している。[3]彼は，1926年ごろから哲学と教育学の研究を開始した。一方では，ノール H. Nohl (1879—1960)，ミッシュ G. Misch (1878—1965)，シ

ュプランガー E. Spranger (1882—1963) などの指導をうけ，これらの哲学者によって媒介されたディルタイ W. Dilthey (1833—1911) の生の哲学を学んでいった。また他方では，1927年に出版されたハイデッガー M. Heidegger (1889—1976) の『存在と時間』Sein und Zeit から強い影響をうけたのであった。したがって，彼における実存哲学の内容は，基本的にはハイデッガーの『存在と時間』の内容に大きく規定されたものであると言うことができる。

更に，彼の思想において重要な役割を果たしているのは，彼独自の哲学的人間学の方法論である。彼はこれを『気分の本質』Das Wesen der Stimmungen (1941)[4] において構成した。この方法論に基づいて彼は思想的進展を成し遂げ，「希望の哲学」の地平に到達しえたのであった。我々はこの「希望の哲学」の核心を，『新しい庇護性—実存主義克服の問題』Neue Geborgenheit, Das Problem einer Überwindung des Existentialismus (1955)[5] において理解することができるのである。

彼は，不安・絶望・虚無などによってこそ実存的自覚に達することができるとする実存主義[6]の立場に対して，信頼・希望などの必要性を強調する。彼によれば，意義のある人間生活は，実存主義が提示したような絶望的な孤独化のなかに成立することはできず，むしろそのような孤独の足かせを断ち切るところにこそ成立するという。そしてそれは，実存主義においては切り捨てられていた「支えている実在」eine tragende Realität を，人間が再び取り戻すことによってのみ可能であるとする。この「支えている実在」の内容としてボルノーは，「他の人間，人間の共同社会，このような共同社会がその生活をそこで形成した種々の制度，更には生活のなかで生産的になりうるかぎりでの精神的世界のいろいろな力」[7] などをあげているが，これ等は，生と世界に対する信頼 Vertrauen と，それに根ざした未来に対する希望 Hoffnung とに人間が満たされることによって獲得されることを，彼は述べている。

このようにして人間は，素朴な人間がもっている疑いのない単なる安定

性とは全く相違した，絶えず新たな脅威と戦いつつ獲得される「新しい庇護性」neue Geborgenheit の感情に到達することになると彼は提起しているのである。この「新しい庇護性」は，ボルノーの「希望の哲学」の中心的概念である。彼はこれを，「目の前におけるあらゆるものの崩壊にもかかわらず，深いところでは究極的な信頼の基盤が無事に残っているという確信」[8]であると述べている。

ところでボルノーは，『新しい庇護性—実存主義克服の問題』の中で，「新しい庇護性」獲得の前提としての「支えている実在」は，「ヤコービによって正当にも信 Glaube[9] と呼ばれたあの仕方でのみ接近することができる」[10]と述べている。したがって彼は，すでに彼の処女論文である『ヤコービの生の哲学』を執筆した時点で，「希望の哲学」の核心的問題を獲得していたのではないだろうか。また，このヤコービ研究の内容を検討することによって，「希望の哲学」の概念の核心とその基本的性格もより一層明らかになるのではないだろうか。

このような問題意識のもとに，次項においては，ボルノーのヤコービ研究を具体的に検討してゆくことにする。

Ⅱ．ボルノーのヤコービ研究の方向と意図

1．ヤコービ研究における課題

ボルノーは，1929年ゲッチンゲン大学において，ノールとミッシュのもとで『ヤコービの生の哲学』と題する大学教授資格論文の執筆を開始し，1931年同論文を脱稿した。まず，ボルノーのこのヤコービ研究における課題を明らかにしておく必要があると思われる。

ボルノーは，同論文の執筆の背景について次のように述べている。「本研究は，現在ドイツにおいて“生”と“実存”の哲学として進行している運動との関連の中で生じたものであり，歴史を探ることによって，体系的な問いの解明に寄与しようとするものである」[11]。この証言から我々は，ボルノーの「希望の哲学」の基盤を形成している生の哲学と実存哲学[12]とが，

このヤコービの生の哲学に関する論究過程に関わりをもっていることを見出すことができる。

ボルノーは，この“生”と“実存”の哲学の発端を，第一にシュトゥルム・ウント・ドラング Sturm und Drang の運動にみている。全ての生の哲学の固有の問題は“思考”と“生”の関係についての問題であるが，「……シュトゥルム・ウント・ドラングにおいて，ドイツ精神史の中で支配的な悟性の位置は，初めて現在に直接的に影響を与える仕方で疑問とされた」[13]とボルノーは述べているのである。

更にボルノーは，このシュトゥルム・ウント・ドラングの運動の中で重要な役割を果たした哲学者が，ヤコービであることを指摘して次のように述べている。「シュトゥルム・ウント・ドラングの内部では，またこの世代が生んだ唯一の事実上の哲学者としてのヤコービにおいて（ドイツ精神史の中で支配的な悟性の位置が）疑問に付された。」[14]このようなヤコービに対するボルノーの注目は，彼がヤコービ思想の中に，次のような独自性を見出していたことによるものである。

その第一は，ヤコービの生の感情の固有な実質である敬虔な精神 der pietistische Geist[15]である。これによってヤコービは，シュトゥルム・ウント・ドラングの運動の中にあって，「人間における最高の宗教的内面性の解放」[16]を意味するような生の直接性 Unmittelbarkeit の意義を認識していったのであった。ボルノーは，この背景からのみ，彼の「信」の哲学 Glaubensphilosophie が発展したと述べている。

その第二は，ヤコービが，明確な形式と概念的な思考の必要性をも認識していたことである。彼はシュトゥルム・ウント・ドラングの運動の中にあって，涸渇した諸形式の対立概念であるところの生の直接性の意義と権利を認めていたものの，次第にその限界をも見出していったのである。

その第三は，ヤコービの思想の中にある「中途半端さ」die Halbheiten である。彼は，彼の敬虔な精神に規定された内容をもつ生の直接性を主張すると同時に，概念的な思考の必要性をも認識していたという，困難性の

中にあったのである。しかしボルノーは，このようなヤコービが直面する内的矛盾が，「……彼を全ての思弁的な体系構成から，この矛盾がそこに根ざすものとしての事実性における人間の実存の注意深い研究へとつれもどした」[17]ことを指摘している。

このような思想的独自性のゆえに，哲学者としてのヤコービは，文学運動としての性格の濃いシュトゥルム・ウント・ドラングの中で彼独自の哲学を発展しえたとボルノーは考えているのである。彼が，ヤコービを「唯一の事実上の哲学者」として評価する理由もここにあった。そして，ヤコービの思想的特質から生まれてくるこの「概念」と「生」との関係は，それ以降の全ての生の哲学者の固有な問題でもある。この点にボルノーは注目し，その中に「生の哲学者」としてのヤコービの特質を見て取ったのであると思われる[18]。

このようにボルノーは，ヤコービの著作[19]を検討してゆくことによって，シュトゥルム・ウント・ドラングの運動の中でこれを理論化しようと企てた哲学者としての，また生の哲学者としてのヤコービの思想的特質を明らかにしようとしているのである。

それでは次に，このボルノーのヤコービ研究と，「希望の哲学」との関連について見てみよう。

2．ヤコービ研究の構成と「希望の哲学」

ボルノーは，ヤコービの「信」の哲学の中に，ヤコービ固有の生の哲学の実質的内容を見出している。したがって，ボルノーの論究も，ヤコービにおける「信」の概念を中心として解明するものになっている。

「第一章，生の直接性」及び「第二章，新しい問題提起」においては，ヤコービ思想の中に見出しうる生の直接性・根源性 Ursprünglichkeit の理想について述べると同時に，ヤコービがこれらの生の傾向の一面性と制約性をも見出していたことなどについて述べている。このような前提的な分析をふまえてボルノーは，「第三章，敬虔な態度」「第四章，信の対象」

「第五章，信と知」「第六章，信の本質」において，ヤコービの「信」の哲学の解明を行なってゆく。そしてそれまでの論述を総括するようなかたちで，「第七章，概念と生」において，ヤコービの「信」の哲学を内側から規定した「概念」と「生」の問題について論究しているのである。

以上のような全体構成において第三章では，ヤコービの「信」の解明を通して，人間の生における「信」の意味についての検討を行なっている。したがって，ここでは「信」の問題は，主として人間の主体の側に引きつけて論じられている。そして更にそれ以降の章においては，ヤコービの「信」の概念は，彼の神概念と敬虔主義・汎神論・伝統的なキリスト教などのそれとの比較検討を通して多面的に考察されてゆき，次のような形で整理されている。[20] ①論理的根本命題の知的な明証性としての「信」。②感性的な直観の所与性としての「信」。③人間に精神的世界や，価値や，一般に生の了解が与えられるような仕方・方法としての「信」。④不確実な知識としての「信」。

ところで，このような多様な内容をもつヤコービの「信」の概念の解明を通してなされたボルノーのヤコービ研究の中で，特に彼の「希望の哲学」との関連で重要な部分はどこであろうか。

この問題を考える上で重要な点は，次のようなことである。ボルノーは『新しい庇護性—実存主義克服の問題』の中で，人間を「新しい庇護性」へと導く生と世界への信頼すなわち存在に対する信頼 Seinsvertrauen においては，「どんな特定の宗教的解釈の以前にもやはり存在している，こうした基礎的な存在関係を取り扱っている」[21]ことを述べ，更に「信 Glaube の概念を特定の宗教的信仰という意味に極端に狭める危険がなければ……存在に対する信 Seinsgläubigkeit と呼ぶこともできるであろう」[22]と付け加えている。したがって，ボルノーの「希望の哲学」においては，「信」の対象や神概念の詳細な規定よりも，「信」という行為がもたらす人間の生にとっての意義が問題であると言いうるであろう。

このような意味で，「信」における人間の態度および気分を，様々な視

点から明らかにしている「第三章，敬虔な態度」は，「希望の哲学」との関連で特に重要であると思われる。ここでしばらくボルノーの叙述に沿って，この章を検討してゆくことにする。

Ⅲ．ボルノーによる「敬虔な態度」の解明

1．「信」と「不信」

ボルノーは，「信」Glaube も「不信」Unglaube もともにまず未規定な「気分」Gemutsstimmung として規定されるという。「信及び不信は，それゆえ，ディルタイによって示された意味における体験の状態 Erlebnislage か，あるいは近ごろハイデッガーによって哲学の用語として規定された言葉の意味での気分 Stimmung なのである。すなわち，主体のある態度や，主体のある態度決定の前提となっている人間の現存在の根源的情態性 Grundbefindlichkeit である」[23]。したがって気分としての「信」及び「不信」は，ある一定の対象に向かう一般的な感情のすべてからは区別されるわけである。

ボルノーは，「信」を検討する前提として「不信」を検討している。「不信」に陥いる以前の「素朴な人間が，同胞 Mitmensch との接触をすぐに見出すとしても，人間の接触を妨げ，人が他との関連を得ようと努力すればするほどますます妨げるような何ものかが人と人との間に介入して来る」[24]。[そして人間と同胞との全ての精神的関連は分裂し，人間は孤立する。このようにして，他者及び事象などの外界との関わりにおいて，生の全き直接性 volle Unmittelbarkeit des Lebens をつかもうとして満たされず孤立していった人間は，世界との全ての関連を失い，生における彼にとっての全ての価値と意味とは崩壊し，「不信」に陥いることになる。

「不信」においては，何か一定の内容のものへの「信」が否定されているのではなく，「信」そのものがしりぞけられているのである。この状態に陥った人間は，空虚すなわち荒涼 Örd の中にある。そして彼は，外界とは一切関わりを持つことはないのであり，自己のからの中に閉じこもり

続けるのである。そしてボルノーは，このような「不信」の気分を，「絶望」 Verzweiflung として規定している。

以上のような「不信」の分析をふまえて，ボルノーは「信」の分析を遂行してゆくのであるが，「信」における「敬虔な気分」 die gläubige Stimmung は，「至福」 Seligkeit として規定されている。

2．「敬虔な気分」

ボルノーは，「信」における「敬虔な気分」としての至福の特質を明確にする為に，他の肯定的な気分との比較検討を行なっている。

①．至福は，特定の具体的な層と結びついた他の肯定的な気分（快活さ，上機嫌など）とは違って，人間を彼の全体性において捕え，彼の本質的な核心に触れさせる。そして至福はまた，特別な信心深い気分となるのである。

②．一定の具体的な層と結びついた他の肯定的な気分は，中断し消え去ってゆくものであるのに対して，人間を全体的にとらえる至福は，その本質において不変の「持続」 Dauer，「永遠」 Ewigkeit を意味している。

③．無条件の「安定性」 Sicherheit[25] と「庇護性」 Geborgenheit は，至福に属している。すなわち，それ以外の肯定的気分が，いつもただ外的な層に触れ，それ故に人間に，いつも彼の中にまどろんでいる不安定性を瞬間的にのみ忘れさせることができるのに対して，至福は，人間における全ての層を一貫しており，どのような種類の出来事にも揺れ動くことのない人間の安定性を意味している。

④．至福に属するこの無条件の安定性は，生の感情の神秘的な特徴である「平安」 Stille を可能にする。ここにおいて，たえず人間の内的な不安をごまかしている騒々しさや，落ち着きのなさは静まるのである。

このようにボルノーは，全体性，永遠，安定性，平安などの契機を，「敬虔な気分」としての至福の特質としてとりあげているのであるが，更に次のような説明を付け加えている。

至福は，世界に対する開放性を意味し，自ら出て行って世界の事物との関係を結ぶ覚悟をつくり出す。人間にこのような気分が生ずる時には，必然的に隣人との共同に導くのである。そして，この隣人との共同によって生まれた幸福は，決して一人の人間との共同のみにその人間を押しとどめておくことはなく，「全人類」ganze Gattung との共同に向かわしめることになる。このようにして，人間を支え，包み，高める生は積極的に肯定されて活動的になり，「私」Ich を越えた超個人的な価値 überpersönliche Werte と価値可能性 Wertmöglichkeiten へと方向づけられることになるのである。しかしボルノーは同時に，素朴な安定性がくずれて生じた「不信」の克服としての「信」の覚醒は，「何ら信にとって最終的に確固とした何ものをも与えはしない」[26]ということも想起せねばならないことを指摘している。

3．「信」における人格的な自己投入

更にボルノーは，これまでのように，人間に訪れ，人間の力の外側に存立する気分として「信」を規定するだけでは不完全であるとし，「信」が同時に人間の自由な決定を必要としていることを指摘している。この自由は「……生じる気分を，それ自体として明らかに把握したり拒否したりする能力である」[27]。この能力によって，人間は単なる受身の気分状態にある自己を越えてゆき，固有の精神的な生を外部に成長させることができることになる。

しかしボルノーは，このようなかたちで人間が自由の領域を獲得するに際しては，絶えず特別な勇気 Mut と自己投入 Einsatz が必要であることを指摘している。ある人間を信じるには，彼固有の生の安定性を放棄し，同胞を信頼しきり，安全かどうかを推し量ることなく彼の実存の一部を同胞に引き渡さねばならない。つまり人間は，「信」における自己投入の勇気をもつことにおいてのみ「ざっくばらんになり，彼の外部の生と接触するに到り，そしてついにこの接触において，共同体を，一般的に言えば精神的世界を構築することができるのである」[28]。

またボルノーは，このようなヤコービの「信」は証明不可能なものであることを指摘する。人間は，敬虔で幸福な気分の中で高められた積極的な生の肯定としての生の可能性 Leben-können をより所にして，生の意味 Lebenssinn をつかみ取ることになる。しかし，この生の意味そのものは，前もって予感されてはいるが決して証明することのできないものなのであり，このような生の意味を土台として人間は自己の生活を構築し，自分自身をその上にゆだねることになるのである。ヤコービにおける「信」とは，このように，まだ見えざるものへの賭けとしての性格をもったものであり，したがって証明不可能なものであるとボルノーは言うのである。

以上のようなボルノーの「敬虔な態度」についての分析を通して，次のような事実が浮かびあがってくるように思われる。

人間の生は，素朴で自然な安定性の中にいつまでも留まっていることはできず，その安定性を放棄することによって，外界との関わりを獲得せねばならない。しかしそのような試みは，絶えず襲ってくる攻撃によって挫折を余儀なくされざるをえないものであって，人間はそれによって「不信」に陥いる危険性を認識していなければならない。問題は，この「不信」の状態から新たに生じた敬虔さとしての「信」の状態へと覚醒させられることであり，そこに「信」の本来の意義があるわけである。そしてまた人間の有限性のゆえに，「信」における敬虔で幸福な気分は絶えず揺れ動く危険性を内に孕んでおり，まさに「人間の生は，『天国』と『地獄』との間の不変の対照なのであり」[29]，「信」と「不信」との間にそこここに投げ出されるものなのである。

Ⅳ. 総括——ボルノーのヤコービ研究における「希望の哲学」の端緒

このようなボルノーのヤコービ研究に内在する，「希望の哲学」の端緒を，最後に総括しておくことにする。

1．人間学的な問題設定

まず第一に指摘せねばならないと思われることは，ボルノーによるヤコービの生の哲学解明における問題設定が，極めて人間学的であるということである。ボルノーは，このヤコービ研究の後に，主にプレスナー H. Plessner（1892～　）に依拠しつつ，彼独自の哲学的人間学の方法論的原理を構成し，それによって「希望の哲学」を進展せしめたが，すでにこのヤコービ研究における時点で，人間学的視点の意義を明確に認識していたのではないかと思われる。(30)

この問題を検討してゆく上で特に重要であると思われるのは，ボルノーが，哲学的人間学と生の哲学との関係をどのように把握していたかということである。ボルノーのヤコービ研究における人間学的な性格について検討してゆく前に，まずこの問題についての彼の証言を提示しておきたい。彼は『教育学における人間学的見方』 Die anthropologische Betrachtungsweise in der Pädagogik（1965）において次のように述べている。

従来の認識論の崩壊によって，必然的に人間の全体的考察つまり哲学的人間学へと通ずる道が示されることになった。哲学的人間学へのこのような通路は，生の哲学との結びつきによって開かれた。すなわち，生の哲学が安易な非合理主義以上のものであらんと欲したところでは，「……若者の性急さで反抗したあの客観的諸力の働き，つまり抽象的概念や道徳的掟や固定した諸形式の働き一般を人間の生の内部で把握し，それを人間の生の中にある根源につれ戻して，そこからそれを解釈する」(31)という問題に直面することによって，必然的に哲学的人間学への道を指し示すことになった。したがって，哲学的人間学は「……根源的な生の哲学の端緒の首尾一貫した完成として理解される」(32)。

その哲学的人間学は，ヤコービを，シュトゥルム・ウント・ドラングの運動の中で特異な位置を占める「生の哲学者」として注目させた。すなわちボルノーは，ヤコービ研究の主要課題を，「概念と生の関係に対するヤコービの立場を可能な限り明確にすること」(33)にしぼることによって，生の

哲学の本源的傾向を明らかにしようとしたのである。

この検討過程を通して，ヤコービにおいて概念的思惟が，生の現実性全体においてその機能を問われているという傾向をボルノーは見出している。また彼は，その内容を詳細に吟味しつつ，彼自身の思想的枠組みの中に導入しているのである。

まさにボルノーのこのような問題設定とその考察は，上に見たような「客観的諸力の働き……を，人間の生の内部で把握し，それを人間の生の中にあるその根源につれ戻して，そこからそれを解釈する」という方法の具体的な検討であり，またその遂行であるわけである。この傾向は，前述のように，「信」の概念の分析の過程においても明確に見出された。すなわち「信」の意味を人間学的に問うことによって，人間の本質とその世界への関係に関する洞察を獲得することができたのである。

このようにボルノーは，すでにこのヤコービ研究における時点で，「希望の哲学」を進展せしめた人間学的視点の意義を，十分に認識していたものと思われる。

2．ボルノーの生の哲学と実存哲学に対する態度

ところでボルノーは，幸福な気分分析の過程における註の中で，次のように述べている。「ヤコービによってただばらばらに描かれたこの（気分の）関連は，近ごろハイデッガーによって，哲学の体系的・存在論的基礎づけにおいて成し遂げられた。この思想の具体的展開は，もちろん全く他の方向に進んでゆくのであって，彼にとって不安は，存在の固有の本質を解明する気分となるのである[34]」。ボルノーは，幸福な気分の中にある人間は，必然的に隣人との共同へと進んでゆき，それによってこのような気分の中で全ての精神的な生が安らぐことを述べており，不安と対立する敬虔で幸福な気分の意義を十分に認識していた。それゆえ，上の彼の証言からも理解しうるように，すでにこの時点で，不安の気分から構成されたハイデッガーの実存哲学との距離を感じていたと思われる。

また，ヤコービ論文の執筆開始以前の1927年から1929年の間に，ボルノ

ーにとって重要な三つの書物が刊行されていた。[35] すなわち，①ディルタイ全集Ⅶ巻（1927）②ハイデッガーの『存在と時間』（1927）それに③ミッシュの『生の哲学と現象学』（1929〜30）の三つである。これらは，ボルノーの思想形成に大きな影響を与えたのであるが　現在の問題との関連において重要なのは，ミッシュの論文[36]である。この論文は，ハイデッガーと対決したものであり，ボルノーのヤコービ研究の指導教授であったミッシュが同時期に出版したものである。したがってボルノーは，すでに「ミッシュとノールに非常に影響されていて，ハイデッガーの本来的信奉者になることはできなかった[37]」のである。

このような，ヤコービ研究における証言と経歴上の事実から判断しうるように，ボルノーは『ヤコービの生の哲学』において，“生”と“実存”の両哲学のそれぞれの固有の正当性を認識し，それぞれの視点を援用しつつ論究していったにもかかわらず，ハイデッガーの実存哲学における不安にもとづいた人間の本質規定とは全く対立した，敬虔で幸福な気分の人間の生にとっての意義を明確に把握していたのである。そして，ハイデッガーの実存哲学の一面性を認識していたことは否定しえないことであると思われる。

したがって，ボルノーの二つの思想的源泉に対する基本的態度，すなわちハイデッガーの実存哲学の一面性の認識と，それを補完する可能性を内在しているものとしての生の哲学への注目という態度が，すでにこの時点に生起していたと推測しうるのである。このようなヤコービ研究におけるボルノーの立場は，その後の「希望の哲学」の進展過程の中においても一貫して認められ[38]，ヤコービ研究の「希望の哲学」の端緒もここに見出しうるのである。

3．「敬虔な態度」解明のもつ意義

(1). 肯定的な気分への注目

ボルノーは，人間は素朴な自然的安定性のうちにとどまり得ないこと，人間の有限性の宿命としての「不信」の状態に陥らざるをえないことを認

識していた。しかし，不安や絶望のみが哲学的に重要な気分であるとする立場に対立して，幸福な気分・至福な気分においても人間は意義ある生を獲得しうると認識していた。彼は，ヤコービの証言をたよりに，人間の生を実り多いものにする幸福の気分・至福の気分の固有な意義を把握し，その点に主要な関心を向けることによって，肯定的な昂揚した気分状態によって開示される人間の本質とその世界への関わりについての洞察を獲得することができたのである。

このようなボルノーのヤコービ研究を通して到達しえた認識は，彼自身をその後の『気分の本質』における気分の解明へと駆りたて，「希望の哲学」の進展を可能にしたのであった。

(2). 「新しい庇護性」の崩芽

「希望の哲学」の核心的概念である「新しい庇護性」は，「支えている実在」を人間が再び取り戻し，希望のない不安と孤独の中から脱却して，新たな安らぎを獲得することであった。しかし，「実存的な危機を通り抜けてきた我々は，不動の安定性を再び手にすることはできず」[39]，この「新しい庇護性」は，絶望に陥る以前の素朴な安定性とは区別されるものであると．ボルノーは指摘する。すなわち，人間はいつも脅やかされているままであり，たえず新たに努力することによって，つねにおそってくる絶望から守られねばならないのである。ボルノーがこの庇護性を，「新しい」と表現する理由もここにあった。

この「新しい庇護性」は，すでにヤコービ研究において「新しく生じた敬虔さ」 neu entstandene Gläubigkeit[40] として言及されており，その原型は形成されていた。ボルノーの指摘によれば，彼において重要なのは「不信」から「信」を覚醒させることである。すなわち，「不信」の絶望と不安の中にある人間が，再び自己を支え担う基盤を取り戻し，世界への開放性を獲得することによって，意義ある生の意味をつかみ取ることが問題なのである。また，こうして生じた「信」における人間の安定性・安らぎは，決して「不信」に陥いる前の素朴な人間の自然状態ではなく，一度

獲得されたら失なわれることのないものでもないことを明確にしている。すなわちそれは，絶えず襲ってくる新たな脅威に対峙しそれを克服することによってもたらされるものであることもボルノーは述べているのである。

このようにボルノーは，すでにヤコービ研究の過程で，「新しい庇護性」の萌芽を見出していたのである。

(3). 「超越」を指示するものとしての「信」

ボルノーは前述したように，　ヤコービの「信」の概念の分析によって，「希望の哲学」の核心的概念である「新しい庇護性」の萌芽としての内容をみいだしていた。ところで，人間が「新しい庇護性」の感情に満たされるための前提である「支えている実在」の獲得についてボルノーは，後に「希望の哲学」の地平に達しえた時点で，次のように述べていた。「支えている実在は，ヤコービによって正当にも信と呼ばれたあの仕方でのみ接近することができる」。したがってボルノーによれば，人間の存在を根底から支えるものは，根本的に証明不可能である「信」という行為であることになる。

「信」という行為において，自己の存在を越えたところに究極の拠りどころ，すなわち支えるものを求めようとするボルノーの主張は，人間の「生」のレベルを乗りこえて，究極的で絶対性をもった他者へと指向するものであり，実存哲学の発端そのものの本質のうちに必然的に内在する「超越」Transzendenz を指示するものである。(41)

この事実は，後にボルノーが生の哲学に内在する相対主義を明確に指摘したことによっても理解しうるものである。生の哲学においては，その基礎をなすものとしての「生」の概念のあいまいさが存在することによって，「……哲学における究極的で絶対的なものを全て棄てさる恐れのある一般的な相対主義が生じたのであった」。(42)

ボルノーの思想的基盤であるところのディルタイにおいても，次のような相対主義が存在していた。ディルタイの生の哲学は，精神的世界，芸術や科学などの広大な文化領域などを，それらを生み出した母胎である生か

ら了解 verstehen しようとするが，それら了解された事柄は並列的，相対的関係におかれたままであった。生の哲学は，「生」のレベルにとどまるかぎりこのような相対主義は克服しえないのであり，これを実存哲学は，確固たる支柱を人間の内奥の中核である「実存」の概念によって解消しようとした。そして実存的な場においては，実存と同時に「超越」が同じ一つの分かちえぬ経験において与えられているのである。

ボルノーのこのような指摘からも理解しうるように，彼は「信」という行為によって生起する人間の存在を支え担うものを，自己の「生」を越えて求めねばならないと考えていたものと思われる。

以上のような分析から，ボルノーの生の哲学と実存哲学への態度——実存哲学の一面性の認識と生の哲学によるその補完——の理解も，より深化してゆくのである。

註

(1). Bollnow, Die Lebensphilosophie F. H. Jacobis, Stuttgart 1933, 2. Aufl. 1966.

(2). ボルノー講演集，下程息訳「生きる力」（「希望の哲学」），玉川大学出版部，1970年，p. 139.（傍点著者）

(3). ボルノー著，藤縄千艸訳『気分の本質』，筑摩書房，1976年，日本語版へのまえがき（1968年）参照。

(4). Bollnow, Das Wesen der Stimmungen, Frankfurt am Main 1941, 5. Aufl. 1974. ／邦訳書，藤縄千艸訳『気分の本質』，筑摩書房，1976年。

(5). Bollnow Neue Geborgenheit, Das Problem einer Überwindung des Existentialismus, Stuttgart 1955, 3. Aufl. 1972. ／邦訳書，須田秀幸訳『実存主義克服の問題——新しい庇護性』，未来社，1969年。

(6). ボルノーは，『新しい庇護性—実存主義克服の問題』の註において，「実存主義」，「実存哲学」という用語使用について，次のように説明している。

人びとは通例，「実存主義」という名称によって，より多くフランス的傾向（それに対応する文学的運動をも包含する）を表わし，「実存哲学」によっては，より多く（より狭い哲学的連関に制限して）ドイツ的傾向を表わす。「しかし，この著述では，この相違はそれほど重視されてはいない。そして，この著書で，総括的な意味で，一般的に実存主義について述べる場合，それは，我々の時代の

精神的状況において多様な相をなして目立っている，この精神的運動全体が示されている……」。(Neue Geborgenheit, S. 17.／上掲邦訳書，p. 234.)

筆者も，このようなボルノーの規定に従うものとする。

(7). Bollnow, Neue Geborgenheit, S. 23.／上掲邦訳書，p. 20.

(8). Bollnow, Anthropologische Pädagogik, Tokyo 1971, 2. Aufl. 1973. S. 104.／邦訳書，浜田正秀訳，『人間学的に見た教育学』玉川大学出版部，1973年，p. 94.
なお，ボルノーが提示する「新しい庇護性」における確信と，質的に同一なものを表現していると筆者が考える，リルケ R. M. Rilke (1875-1926) の「秋」という詩の一節をあげておきたい。

地球も真夜なかには星々の世界から
ひとり孤独の空間へ落ちるのではあるまいか
われわれは落ちる　いまそこにある手が落ちる
あたりのものをじっと見てゐると　さういう気がしてならぬ
しかし　このやうに何も彼も落ちるのをそっとどこかで大切に受けとめてゐる
大きな手があるにちがいない
(大山定一訳『ドイツ詩抄』より)

(9). ヤコービにおける Glaube は，特別な宗教的な意味からは自由に，またそれよりも広く用いられている。そして，それに依拠したボルノーの Glaube も，特定の宗教的解釈以前の Glaube という人間の行為を特に問題にしていると思われる。したがって筆者は，Glaube という語に対して「信仰」という訳語を与えることを避け，「信」という訳語を使用することにする。

またボルノーは，このヤコービの信 Glaube の概念から，信頼 Vertrauen の意義を見出していったものと思われる。(本稿II. 2. ヤコービ研究の構成と「希望の哲学」参照)

(10). Bollnow, Neue Geborgenheit, S. 151. ／上掲邦訳書，p. 172.

(11). Bollnow, Die Lebensphilosophie F. H. Jacobis, Vorwort.

(12). ボルノーは，実存哲学を，「ニーチェやディルタイによって具体化されたような生の哲学の本来の傾向を徹底化したもの」として把握している。(Vgl. Bollnow, Existenzphilosophie, Stuttgart 1943, 4. Aufl. 1955. S. 11. ／邦訳書，塚越敏・金子正昭共訳『実存哲学概説』，理想社，1976年，p. 15. 参照)

(13). Bollnow, Die Lebensphilosophie F. H. Jacobis, S. 10.

(14). ibid. S. 10. (括弧内筆者)

(15). ボルノーは，ヤコービの思想を規定した一要因として「敬虔主義」Pietismus

をあげている。（Vgl.ibid. S. 12.）

(16). ibid. S. 13.

(17). ibid. S. 14.

(18). このようなボルノーのヤコービ解釈は，彼のディルタイ理解に規定されていたものと思われる。すなわちボルノーは，『生の哲学』Lebensphilosophie（1958）において，次のように述べているのである。

彼は，まず美学研究から出発したニーチェ W.Nietzsche（1844—1900）の立場を説明した後に，次のように生の哲学者としてのディルタイを性格づけている。「ディルタイは，本質的により静かな性格」であり，彼においては「哲学は科学の扱う研究と密接に結びついているのである。だからディルタイは，生の哲学における非合理主義があまりにも科学的な精神から解放され過ぎる危険があるからこそ，特にその方法的厳密性という点において重要である」。

(Bollnow, Die Lebensphilosophie, Berlin-Göttingen—Heidelberg 1958, S. 6-7. ／邦訳書，戸田春夫訳，『生の哲学』玉川大学出版部，1975年，p. 23.）

すなわち，ディルタイの生の哲学においては，生の直接性や生きている生のみが強調されているのではなく，科学的方法，概念的思考の必要性をも提起されていることを，ボルノーは認識していたのである。このボルノーのディルタイ理解に関する証言は，ヤコービ研究（1929～1931）よりも後のものであるが，彼が哲学と教育学の研究を開始した時点ですでにディルタイの思想に大きく影響されていたことを考慮するならば，このようなボルノーのディルタイ評価がヤコービ研究に際しても強く影響していたことも否定できないと思われる。

(19). ボルノーは主に，ヤコービの „Allwill"（1775～76）と „Woldermar"（1777～79）の二つの小説にもとづいて検討を行なっている。

(20). Bollnow, Die Lebensphilosophie F. H. Jacobis, S. 188～189.

(21). (22). Bollnow, Neue Geborgenheit, S. 25. ／上掲邦訳書，p. 22.

(23). Bollnow, Die Lobensphilosophie F. H. Jocobis, S. 92.

(24). ibid. S. 88.

(25). Sicherheit の訳語としては，「安全性」あるいは「確実性」などが考えられたが，Sicherheit はここにおいては，一方では肯定的気分の他の諸現象と区別された至福 Seligkeit における揺れ動くことのない安定した状態を表現し，また一方では庇護性と関連して，外界の脅威から守られている状態を表現しうるような「安定性」という訳語を選んだ。

(26). Bollnow, Die Lebensphilosophie F. H. Jocobis, S. 104.

(27). ibid. S. 106.

(28). ibid. S. 107.

(29). ibid. S. 105. なおこのボルノーの表現は，ヤコービの著作からの引用であるが，「希望の哲学」の内容が展開されている，『新しい庇護性—実存主義克服の問題』(1955) の中で，後にボルノー自身の表現として用いられている。(Vgl. Neue Geborgenheit, S. 25. ／上掲邦訳書，P. 23. 参照) これは，ヤコービ研究が「希望の哲学」の端緒としての性格をもっていたことを物語るものである。

(30). ボルノーはヤコービ研究の後に，1941年の『気分の本質』において，彼独自の哲学的人間学の方法論的原理を構成し，それ以降もその方法論的原理を詳細かつ厳密に規定していった。しかし，このヤコービ研究においては，そのような明確な哲学的人間学の方法論は提出されていない。したがって，ここでは一般的に「人間学的な問題設定」「人間学的視点」などと表現しておくことにする。

(31). Bollnow, Die Anthropologische Betrachtungsweise in der Pädagogik, Neue pädagogische Bemühungen, Essen 1965, S. 28～29. ／邦訳書，岡本英明訳，『教育学における人間学的見方』玉川大学出版部，1977年，p. 63.

(32). ibid. S. 29. ／同上訳書，P. 63. (傍点筆者)

(33). Bollnow, Die Lebensphilosophie F. H. Jacobis, S. 10.

(34). ibid. S. 104. (傍点筆者)

(35). この箇所における筆者の考察は，主にボルノーの『人間学的に見た教育学』の中の「略伝」(上掲邦訳書，P. 304～305) と，岡本英明著『ボルノウの教育人間学』(サイマル出版会，1972年) における叙述 (P. 4～6) にもとづいてなされている。

(36). G. Misch, Lebensphilosophie und Phänomenologie, Bonn 1930.

(37). 岡本英明著，『ボルノウの教育人間学』P. 4.

(38). すなわちボルノーは，『気分の本質』(1941) において，ハイデッガーの「現存在の分析論」Analytik des Daseins と対決しつつ，昂揚した気分の意義を詳細に明らかにし，また『実存哲学概説』(1943) においては，実存哲学の限界を明確に指摘しつつ，その克服の道を，「生と世界の哲学」によって実存哲学では排除されていた内容を哲学的に認識することによって見出すことを提起していた。この「生と世界の哲学」こそ，“生”と“世界”を統一的な概念として把握したディルタイの生の哲学であり，またその方法論としての解釈学と，その発展としての哲学的人間学であると思われる。このような論究の過程を経て，『新しい庇護性—実存主義克服の問題』(1955) における「希望の哲学」の地平に到達していったのである。

(39). Bollnow, Anthropologische Pädagogik, S. 105. ／上掲邦訳書，P. 94.

(40). Bollnow, Lebensphilosophie F. H. Jacobis, S. 104. (傍点筆者)

(41). Vgl. Bollnow, Existenzphilosophie, S. 35～36. ／上掲邦訳書，P. 57～60.

参照。

(42). ibid. S. 12. ／同上訳書, P. 17.

The Clues of Bollnow's "Philosophy of Hope"

Hiroshi Takahashi

Otto Friedrich Bollnow, in his first thesis, *F. H. Jacobi's Philosophy of Life*, tried to define Jacobi's philosophical quality as the philosophy of life. The study of this thesis by Bollnow shows some sprouting clues and fundamental characters which lead later to construct his "philosophy of hope".

The clues are put in three points as follows:

1. Anthropological approach

Bollnow gained an insight into human nature as well as his relation to the world through anthropological approach to Jacobi's concept of "faith". The analysis of "faith" brought him to its anthropological meaning and signifi-cance, which developed his "philosophy of hope".

2. Synthesis of existentialism and philosophy of life

There are two basic threads in his "philosophy of hope", that is, philosophy of life and existentialism. As for the latter, Bollnow had critical views and felt alienated from it already at the time of his first thesis. It semed to be onesided viewpoint to Bollnow, for it is mainly constituted by the "mood of anxiety" as it is typical with M. Heideggar from whom Bollnow was influenced most among the existentialists. To make up the one-sidedness or the insufficiency of existentialism Bollnow insisted on the significance of "pious attitude" which he recognized to dwell in the philosophy of life.

3. Positive attitudes toward life

Through the analysis of" faith" or "piety" Bollnow found the way to get out of "unfaith" or "hopelessness". These positive attitudes

can only lead man to "supreme bliss" and "new securibility" that are essential concepts for his "philosophy of hope".